

---

# 始はヒガシとアズマ

愛田美月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

始はヒガシとアズマ

### 【Nコード】

N7989E

### 【作者名】

愛田美月

### 【あらすじ】

東智之は啞者だ。先天性で、彼は声をだすことができない。大学でも友人のできない智之はある日、構内で呼びかけられるが……。

\*\*\*暇つぶしにご覧いただければ幸いです\*\*\*

**(前書き)**

こちらはお暇つぶしにご利用下さい。

東智之は唾者だった。目も見えない。耳も聞えない。唯一声だけが出なかった。

それは先天性のもので、生まれたときから智之は声の無い生活を続けている。

大学の構内は活気に満ちていた。授業の合間のこの時間は、いたるところで、学生達が立ち話をしている。

智之はそんな人の間を縫うように一人で歩いていた。次の講義まで間があるので図書館で調べものでもしようと思っていた。

その時ふと智之を呼び止める声が聞こえ、そちらに目を向ける。

「おい、あずま」

智之は一応顔を声の方へ向ける。もし智之に声があったなら、智之は即座に言い返していただろう。

僕の名前はあずまじゃないと。

あずまと呼び間違った男は、智之の前で足をとめると何かを差し出した。

「おい、落としたぞ。これ」

差し出されたのはいつも持ち歩いているノートだ。

智之は受け取って頭を下げる。もう一度ノートを渡してくれた男を見上げる。

名前は知っている。坂木翔太だ。この大学の中でも少し目立つ人物で、他学部の生徒にもその名は知られていた。

理由は彼の容姿と性格にある。容姿はモデルにもなれると言われるほど均整の取れた体つきで、顔も堀が深い。

性格は良く知らないが、智之が目にする彼はいつも数人の友人に囲まれて、大きな声で笑っている。そんな印象だった。

「おい、拾ってやったんだから何とか言えよ」

智之は困った。ノートを広げ、とりあえず礼の言葉でも書こうかと思っただけだった。

坂木が舌打ちした。

「ちっ、何だよ。お前いつつも態度悪いよな。皆言ってるぜ？ 付き合い悪いし、超態度悪いって。すっげー高飛車でやな奴ってさ。まあ、お前が一人でいたいならそれでもいいと思うけど？ お前が敵作るのも、みんなお前の勝手だからな」

早口でまくし立てられ、智之は呆然と彼を見上げた。怒っている顔は始めてみた。堀が深い分怒った顔にも迫力がある。

智之自身、自分がどういふ風に誤解されているかは知っていた。話しかけられても、答える術の無い自分。ノートに返事を書いている途中で、待ちきれなくなるのか、話し掛けてきた連中は姿を消すか、怒り出す。

はつきり言っただけ、智之にも言い分はたくさんあったが、言い返す言葉を書く前に、坂木が友人に呼ばれて行ってしまった。

ふと気づくと、あちこちから視線が自分に突き刺さっている。智之がそちらを見ると視線はあらぬ方向へ去っていった。

智之は顔を顰めて、溜息を吐いた。さっきの目的だった図書室へ足を向ける。

言いたいことだけいってさっさと行ってしまおう。最近の若い人は本当にせっかちだよな。

智之はおじさんのようにそんなことを考えていた。

講義を全て終え、智之は大学の構内を出て、中庭を進んでいた。

その時、智之はまた名前を呼ばれた。

今日は良く名前を呼ばれる日だ。しかもどちらも間違えている。今度呼んだ人物は智之にこう呼びかけてきた。

「ヒガシ君」

振り返った智之が見たのは、同じ学部の女性だ。彼女の周りには友人だらう。二人の女性がいる。三人とも今時の格好をしていて、勉強よりも遊びが好きですという感じに見えた。

「ねえ、ねえ、ヒガシ君って彼女いる？」

智之は面食らった。殆ど初めて話す相手にこんなことを聞かれるとは思わなかったのだ。

「実は、美香がヒガシ君のこと結構気に入ってて、もし良かったら付き合ってやって欲しいわけ」

智之は美香って誰だよと思いつつ、喋り続けている女性を見る。さて、困った。こういう誘いは初めてでは無いが、はっきり言うていい気分ではない。

告白するなら自分で言えばいいのに。あと、きちんと名前ぐらい調べると言いたい。

「ね、聞いている？ 美香と付き合ってやってよ」

智之は溜息を吐いて首を振った。

「えー、何よ。ダメって言うの？ 美香アンタも黙ってないでちゃんと言っときな」

智之に声をかけてきた女性は、横に立っていた女性に話を向けた。この子が美香か……。

そう思って、美香と呼ばれた女性を見ると、その女性は智之から目を逸らした。

「もういいよ沙耶。行こう。なんか感じ悪いし。もういいよ」

「えー、まあいいけど。ホント噂どつりやな奴ね。ヒガシ君って最低」

「普通告られたら何か一言あるでしょうが」

「キシヨ」

そう言って彼女達は歩き去って行った。

嵐が過ぎた。そんな気分だ。

何だか今日は本当に疲れた。

朝は男に怒鳴られ、帰りは女に睨まれ。

どうしてこうなるのだろうか。

またまた溜息が吐きたくなってきた。

声が無いだけで、どうにも上手くコミュニケーションが取れない。まあ、がんばってまで取るうとも思えないのだが。小さい時から、学校ではいつも一人だったし、これからもそうだろうと思っている。

中庭を過ぎ、校舎の脇を通っていると、ふと前を歩いている人物の中に、今朝智之に話し掛けてきた坂木の姿を見つけた。彼の周りには二人の友人らしき人物がいる。

智之は見つからない様にと思っ、ある程度の距離を保って彼らの後ろを歩いていた。今朝の事がある。また何か言われたら面倒だと思ったのだ。まあ、気にしすぎかもしれないが。

その時ふと何かが気になって上を見た。

そして見てしまった。

四階の窓にあった植木鉢に窓の掃除をしていた女性がぶつかつた。傾ぐ植木鉢は重力に逆らうことなく窓を乗り越える。植木鉢は前を歩く坂木たちの上に落ちていく。

このままでは脳天直撃だ。智之は焦った。植木鉢を倒した女性は声もなく青ざめている。声があるんだから叫べよ。智之は心の中で悪態を吐く。

何か無いか。彼らの足を止められる物。そんなことを考えている間にも、植木鉢は落ちてくる。

ええい。

智之は持っていた鞆から筆箱を取り出すと思いつきり路面に叩き

付けた。

ガッシャーン

思ったよりも大きな音がした。一斉に智之へ周囲の視線が突き刺さる。坂木たちも音に驚いたのか、こちらを振り返った。

まさにその瞬間。

彼らのすぐ前を植木鉢が通過した。

ガチャ。

すぐそばでした音に驚いた坂木たちが振り向いて、落ちてきた植木鉢を見て騒ぎ出した。回りも騒然となっている。

良かった。

智之は、ほっとして力が抜けた。その場に膝をつくと、壊れた筆箱が目に入る。プラスチックで出来た筆箱は割れていた。その筆箱から飛び出したシャーペンや消しゴムを拾おうと手を伸ばした。

そんな智之の視界に、誰かの靴が入った。見上げると、難しい顔をした坂木が智之を見下ろしている。坂木は自分もしゃがむと散らばったシャーペンを拾ってくれる。それを智之に差し出しながら、坂木は口を開いた。

「なあ、お前、俺たちを助けようとしてこんなことしたのか？」

智之は軽く頷いた。

「一言叫べばいいじゃん。危ないって」

智之はそう言った坂木の前に手を出した。ちょっと待ってという気持ちでジエスチャーしたわけだ。

「ああ？」

訝しげな声を出した坂木に、智之は鞆の中からノートを取り出して広げた。

ノートにはこう書いてある。

『僕は唾者です』

「ぼくは……あしやだって？」

坂木は驚いたような声を上げた。

「あ？ あしやって何だ？」

いつの間にか坂木の友達も、坂木の後ろに立ってノートを覗いている。

「バカ、唾者つていや、喋れない人の事だろうが」

「え？ そうだったの」

智之はそう声を上げた赤茶けた髪の男性にへらつとした笑みを向けた。

「何で言わなかったんだよ」

坂木がふてくされたような声を出す。

そこへすかさず、先ほど唾者の説明をした眼鏡の男性が言った。

「だから言えないんだよ」

「分かってるよ。だからどうして説明しなかったのかってことを俺は言いたいんだ」

智之はもう一度ちよつと待ってとジエスチャーしておいてから、ノートを開いてさつき拾ったばかりのシャーペンの芯を出す。

『説明しようにも、皆僕が書き終わる前に怒ってどこかへ行ってしま』

そう、ノートに書いて坂木たちに見えるように、ノートを持ち上げた。

「ああ、そうか。俺もそうだったかも」

坂木が頭を掻いてそう言った。

智之はもう一度にっこりと笑う。

「えーと、あずま。悪かった」

坂木がいきなり頭を下げたので、智之は慌てた。

『別に謝る必要は無い。けど』

「けどなんだい？ あずま君」

眼鏡の男性が問う。智之は続きを書いた。

『僕の名前は東智之とかいて、ハジメサトシと読むんです。じつはずつと言いたかった』

それを見た三人は三様に顔を見合わせ、そして笑った。

その笑い声に、智之は笑顔を返した。

(後書き)

最後までご覧いただき、本当にありがとうございました。

こちらは数年前に書いたものでございます。しかも長編の第一章の途中までという形です。それを短編形式に少し手直しし、投稿させていただきますました。長編としてはもう書けないとおもいまして。オチがあるような無いような話でございますが、お暇つぶしにご利用いただければいいかなと、投稿させていただきました。

最近、多忙で小説を書けないという現実からのちょっとした逃避でもあるのかもしれない。

では、すこしでもこのお話がお気に召していただけの事を願って。

愛田美月でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7989e/>

---

始はヒガシとアズマ

2010年10月8日15時12分発行